

「経済学方法論と近代社会 — 宇野理論の拡充 —」 要旨

松 崎 昇

本論文は経済学の方法を近代社会システムの研究に適用したものである。ここで経済学の方法とは主に日本の宇野弘蔵（1897～1977年）によって提唱された三段階論を改良したものを指す。すなわち宇野三段階論とはさしあたり経済社会を原理論、段階論、現状分析という三層の論理によって解明しようとしたものであるが、それは近代社会全体に関連する性格ももっていた。そこで私たちはこれを近代社会に関する理論（以下これを社会科学と呼ぶ）へと自覚的に鍛え直し、本質論、形態論、現実論という三層の論理からなる社会科学の体系を提唱したいと考える。

換言してみよう。近代社会を全体的に解明する際のポイントは二点ある。それは近代の時空性を普遍性、特殊性、個別性という三つの論理レベルにおいて捉えること、および近代社会を経済、国家、意識という三つの理論領域の複合体として捉えることである。社会科学における三層三相性である。このうち前者の解明は宇野三段階論を補正することによって可能となる。そこで主たる問題は後者の解明すなわち経済学の三段階論を社会科学の三段階論に拡充することにある。

具体的には本論文は四つの編からなっている。第一編の「社会科学の対象」では社会科学の対象を論定するかたちでその方法を論じている。これによって社会科学の体系の展望が可能となる。それゆえ続く三編で社会科学の体系構成

の簡潔な展開を試みることになる。まず第二編の「社会科学本質論の構成」では〈近代の論理〉の体系的な提示を試みた。そして第三編の「社会科学形態論の構成」では〈近代化の論理〉の体系的な提示を試みた。最後の第四編の「社会科学現実論の焦点」では〈現代の論理〉を考察する際の鍵概念となる双極六相の社会外病理問題の解明を試みた。以下においてそれらを概観してみよう。

第一編 社会科学の対象

まずIの「場所的分析」では、常識に対する科学の必要性について考察したのち、社会科学的には、私たちが現に生きる現実の場から現代へ、そして現代から近代化へ、さらに近代化から近代へと分析を深める必要があることを論じた。この結果として純粋社会が析出されることを明らかにした。

次にIIの「純粋社会分析」では、この純粋社会から諸関係へ、諸関係から諸個人へ分析を進める必要があること、および諸個人が生きるためには三つの必須関係が不可欠なことを論じた。すなわち個々人が生きるためには最小限、対自然、対他人、対自身との関係の構築が不可欠であり、この結果として経済関係、国家関係、意識関係という三つの必須関係が成立することを明らかにした。

さらにIIIの「原理的分析」では、それら諸関係の各々において現象から制度へ、制度から主体へ分析を究める必要があること、および主体の形成論が前提的に必要となることを論じた。これにより〈資本、主権、理性〉という主体が近代社会を三重に編成し統括していることを明らかにした。

最後にIVの「小括」では、社会科学の体系、経済論と国家論と意識論という三つの理論領域の関係、社会科学本質論の体系について論じた。

要するに本編で、社会科学の研究対象は資本、主権、理性という三つの社会的主体であることを明らかにした。

第二編 社会科学本質論の構成

ここでは近代の論理を解明した。ちなみに近代とは個人を第一義とするような人間の存在様式であった。

まずIの「主体論」では、序論で即自体、向自体と即自体社会、主体からなる主体の形成論を展開した。そしてこれを踏まえて生産を直接性、間接性、絶対性においてみた。すなわち即自体の生産、剰余の生産、主体の生産からなる主体の生産過程、次いで主体の構造、主体の運動、剰余の流通からなる主体の流通過程、さらに再生産の前提、再生産の物的条件、再生産の人的条件からなる主体の再生産過程について論じた。

次にIIの「制度論」では、分配を直接（内部）性、間接（外部）性、絶対（再編）性においてみた。すなわち始めに利潤率、権力率、真理率という具体率に導かれるかたちで産業制度、官僚制度、科学制度からなる社会の内的制度について論じた。次いで地代率、権威率、信仰率という外率に導かれるかたちで土地制度、親族制度、宗教制度からなる社会の外的制度について論じた。さらに利子率、実力率、論理率という再編率に導かれるかたちで銀行制度、司法制度、哲学制度からなる社会の再編制度について論じた。

さらにIIIの「現象論」では、流通を直接（即自体）性、間接（活動力）性、絶対（向自体）性においてみた。すなわち始めに商店、政府、マスコミを媒介とする即自体場、次いで労働組合、党組織、学校を媒介とする活動力場、さらに金融界、法曹界、言論界を媒介とする向自体場について論じた。そして終論で純粹社会の存在様式を総合的に論じた。

最後にIVの「小括」では、社会科学本質論の特徴、近代の特徴、社会科学形態論への移行について論じた。

要するに本編で、社会科学本質論の構成は主体論、制度論、現象論という三つの項目からなることを明らかにした。つまり資本、主権、理性という三つの

主体が各々自律し、制度化し、現象する様相を過程的に捉えた。そして特に国家論、意識論の原理的な展開を試みた。

第三編 社会科学形態論の構成

ここでは近代化の論理を解明した。ちなみに近代化とは概ね16世紀から21世紀に及ぶ西洋発世界大の、近代の時空的進展相である。

まずIの「始動期」では、始めに概ね16～18世紀にわたる近代化の始動期を概観した。ここでは前代と近代の関係等を論じた。次いでその内実を主体の形成において考察した。すなわち資本、主権、理性の原蓄等を論じた。さらに国際関係の諸相をみた。ここでは中心部、中間部、周辺部に分けて論じた。

次にIIの「展開期」では、始めに歴史具体的には概ね19世紀中葉のイギリスに典型的にみられた経済主導型の近代化を考察した。ここでは産業革命を通じたイギリスの経済的統合等によって事態を概観したのち、資本主義の体制を論じ、中心国、中間部、周辺部からなる国際関係をみた。次いで概ね19～20世紀交のドイツに典型的にみられた国家主導型の近代化を考察した。ここでは普墺・普仏戦争を通じたドイツの国家的統合等によって事態を概観したのち、主権主義の体制を論じ、中央部、中間部、周辺部からなる国際関係をみた。さらに概ね20世紀中葉のソ連に典型的にみられた意識主導型の近代化を考察した。ここではロシア革命を通じたソ連の意識的統合等によって事態を概観したのち、理性主義の体制を論じ、西側諸国、東側諸国、南側諸国からなる国際関係をみた。

さらにIIIの「終了期」では、概ね21世紀に現われるであろう近代化の終了期を概観した。ここでは近代と新代の関係等を論じた。次いでその内実を主体の過剰において考察した。すなわち資本、主権、理性の過剰等を指摘したうえで、生活の充実を論じた。さらに国際関係の諸相を予測した。やや具体的には三大体制の解体という現状から出発して、新東西体制の成立を予想し、遂には世界

連合の形成に向かうであろうことを論じた。

最後にIVの「小括」では、社会科学形態論の特徴、近代化の特徴、社会科学現実論への移行について論じた。

要するに本編で、社会科学形態論の構成は始動期、展開期、終了期という三つの項目からなることを明らかにした。特に近代化の展開期に関して、経済主導型、国家主導型、意識主導型という三つの型を提示した。これにより例えば旧ソ連等の理論的規定が可能になった。すなわち旧ソ連等とは意識主導型の近代化を行った存在である。だがそれは自己否定的な近代化であったので、一定の経過ののち、自己矛盾に耐ええなくなり自壊した次第である。

第四編 社会科学現実論の焦点

ここでは現代の論理を考察する際の焦点を解明した。すなわち現代の最難問群を概括的に論じた。ちなみに現代とは概ね1990年頃から少なくとも21世紀一杯におよぶであろう近代化の終了期の具体相のことである。

まずIの「経済の外部」では、始めに経済活動の結果が経済社会の外部に近年大きな問題を起こしつつあることを指摘し、続いてそれを具体的に環境問題と健康問題として論じた。

次にIIの「国家の外部」では、始めに国家活動の結果が国家社会の外部に近年大きな問題を起こしつつあることを指摘し、続いてそれを具体的にエスニシティ問題と家族問題として論じた。ちなみにエスニシティとは社会外世界大の今日的な包括的な対人関係問題を扱う概念であり、具体的には人種、民族、難民・移民・外国人労働者等を包括した概念である。

さらにIIIの「意識の外部」では、始めに意識活動の結果が意識社会の外部に近年大きな問題を起こしつつあることを指摘し、続いてそれを具体的に存在観問題と心の問題として論じた。ちなみに存在観の中核に宗教がある。

最後にIVの「結論」では、社会科学現実論の特徴、現代の特徴、そして最後

に社会科学の特徴について論じた。

要するに本編で、社会科学現実論の焦点は環境と健康、エスニシティと家族、存在観と心という双極六相の社会外病理問題からなることを明らかにした。特に西洋発近代の根本的な行き詰まりはこのように意外なところで噴出してきたこと、そしてこれら六点に関して今後新たな倫理が必要となることを指摘した。

参考論文【社会科学の課題】

本論文では、社会科学とは人間の近代的な存在様式を客観的必然性において解明するものであることを明らかにした。すなわちそれは歴史観という前提をもち、非近代性、主観性、偶然性という三つの側面を解明できないという限界をもつ。それゆえ私たちは、社会科学がこのような前提と限界をもつことを自覚したうえで、しかしながらまずは社会科学を体系的に展開する必要があるし展開せざるをえないのである。